

国語一

二〇二三年度 東洋英和女学院中学部 入学審査問題A

受験番号

写

氏名

一 図工の時間にタイルモザイクを使つての作品作りにとりかかった小学生のあき子は、授業中に終わらなかつたので家に持ち帰って仕上げようとしましたが、弟のいたずらにより赤のタイルモザイクを失つてしまい、赤い花を作るつもりが結果的に白い細かな花になってしまいました。次の文章はそれに続く部分です。読んで後の問いに答えなさい。答えは問五(1)と問七(1) 以外は黄色の解答用紙に記入すること。

あきこの作品をみるなり、藤山先生は、

——深田さんは、この花知っているの？

と、おかしいことをききました。こんなでたらめな形の花に名があるのかしら……と、あきこは首を横にふりました。

——やつぱりねえ……。

先生はちよつと気おちしたような声をだしました。

——やつぱりつて、先生……。

あきこは(1)ふしぎで、先生にその花の話をしてくれるようにせがみました。

——それはねえ、ユキコボシっていうの。

きれいな名の花……と、あきこは思いました。先生は、なつかしいおばあちゃんのことでも話すように、そのユキコボシという花のことを教えてくれました。

*

花の大きさはね、野のすみれぐらい。葉っぱはこいみどり色で、こまかなビロードみたいな毛がおおっている。さわるとふかふかしている気もち。大きなスプーンぐらいの大きさの葉っぱにつゆがたまつたとこなんか、それはきれいなものよ。スプーンが五枚あわさつたように集まつたところから、ほっそりしたくきがのびていて、白い花が、ちつちやな星をともしたみたいについている。たいてい、三つか四つ。でもそれが咲くところには、群生というんかなあ、きまつてうんと集まる。根っこは思ひのほか長くてね。ていねいに掘りだして、かげ干しにしようと、おなかのひえたのにきくおくりになるってきいたわ。そうね、タンポポより長いかな。

でもユキコボシを見つけるのはたいへん、村の子どもが何人もつれだつてでないと、はいらないような森のおくでやつと見つかるので、林や、わらび、ぜんまいのとれるようなところでは、まずめつたに見つからなかつた。はじめて見たのは七つのとき。兄さんとその友だちにつれられて、きのこがりにいったときのこと。兄さんはわたしの帯にひもをつけてくれて、森のちよつとした草地にすわらせ、

——ここで待つとるんだよ。

ア

いいつけて、ひもを長くのばし、おくへはいつていった。森の中は空気でみどり色みたいで、何だか川の底にでもすわっているようで、いい気もちだつた。わたしはだまつて長いことすわつた。ときどき銀色のシジミチヨウのかわいのがちろちろとぶのが、ちようど、小さな魚が空を泳いでいるAでたのしかった。

兄さんはなかなか帰つてこない。やつぱり心配になって、ひもをちよいちよいとひっぱつて信号をおくと、すぐにびつびつと、兄さんからあいづれもどつてくる。それでまたわたしは安心しておとなしく待つているのだつた。兄さんの友だちもずつとふかくもぐりこんだらしく、音ひとつきこえない。そのままじつとすわりつづけいきをこらしていると、シジミチヨウのはね音がきこえると思えるほどしずかだつた。わたしはまた、①シジミチヨウのおさかなが川の中をついついと泳ぐのを目で追いはじめる。

(あ、またひとつ、あ、あそこに一ぴき……)

青い光にすっかり目がなれてくる。

と、とつぜん、腰のあたりをきゅん、とひかれて立ちあがつた。

イ

②こんなにはげしい信号なんて、はじめてだつた。わたしは、ひもをたぐつてかけだした。腰まである草も、むちゅうでかきわけかきわけ走つた。

兄さんのすがたが見える。

——あんちゃん、どしただ。

大声をあげたのに、兄さんはだまつてこちらをふりかえつて、につとわらつただけだ。

わたしは、ちよつとこわくなつて立ちどまつてしまった。兄さんつたら、ひとのことをあんなにひっぱつておきながら、ひとが走つてやつてくると、わらつて立つてる。頭がおかしくなつたんだ、と小さなわたしは思つてしまった。でもすぐに兄さんは声をかけてくれた。

——みきつべ、そおつときて、見る。

そおつと歩いていつて、(2)のぞきこんだ。

——な。ユキコボシつてんだ。

きれいな……と口にしたというのもおしかった。まつ白い小さな星が目にしみた。思わず手をのばした。

——つんでもだめだな。

兄さんはつめたくいった。

——おれも何度、おなじことしたかしんね。

ウ

——じゃ、掘つてく。ちゃんと土つけてもつてく。

——だめだ。それも何度もやつてみた。去年も、みきつべのたんじょう日につてな、そつともつてきたが、だめだつた。

森のしずけさ、しつとりした空気、あのみどり色の川底のようなしめりがこの花のいのちをささえてるのかもしれない、と兄さんはぼつんといった。わたしは長いこと、ほんとに長いこと、そのユキコボシの花のむれをながめつづけた。目をとじると白い小さな星がちかちか光つた。しずくになつてこぼれて、花になつた。ユキコボシ。

——よつとおぼえとくんだな。

兄さんはいいい、さ、(3)帰るか……と歩きだし、ほおひ、よ才……と、友だちを呼んだ。

そのときから、ユキコボシのことがわすれられなくなった。

兄さんたちも、野良仕事の手伝いにいそがしくつて、そんな森のおくまではいることは、あまりなかつた。

それからいくさがはげしくなつて、森へいくこともなくなり、兄さんも、その友だちも、きのこがみつとられるように、いくさにつみとられて——帰らなかつた。E

わたしは待った。

自分ひとりでも、あの森にはいることができるまで、大きくなるまで、待った。いくさははげしくなつたが、その山の村まで、敵の飛行機がとんでくることはなかつた。③男だけがみつとられ、きえていつただけだ。それもまたべつの意味で、女ひとりの森行きにはつごうがよく、わたしはある夏の朝、ひとりで森へはいった。十四のとしのことだつた。

村はやつぱりいくさのおかげで、少しずつかわつていたが、森は七年前とちつともかわつていなかった。ずつとふかくなつていた。りょうしもきこりもめつたにはいらなくなつたせいにちがいない。

七年前のことをいっしょうけんめい思ひうかべた。ホシガラスがと

問五

男だけがみつとられ、きえていっただけだ
とありますが、

(1) これはどのようなことを言っていますか、自分のことばで説明しなさい。答えは左の解答らんに直接書きなさい。

といふこと。

(2) ここから読み取れる藤山先生の気持ちとして、あてはまるものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア いづくしみ
イ いきどおり
ウ みじめさ
エ いぶかしさ
オ ひけらかし
カ 無念さ
キ 情けなさ

問六

④ 花の白さが、あのときわらってふりかえった兄さんの齒の白さと重なりとありますが、「あのとき」が指す一文を本文中から探し、初めの**五**字を抜き出して答えなさい。

問七

⑤ 兄さんのいったことを信じなかったわけではない。でも、どうしても、もって帰らなかったとありますが、

(1)「兄さんのいったこと」とは、「兄さん」のどのような経験をもとにしているのですか。解答らんに合うように分かりやすくまとめなさい。答えは左の解答らんに直接書きなさい。

ユキコボシは

という経験。

(2) 「どうしても、もつて帰りがかった」のは、どう考えたからですか。それを示す一文を本文中から探し、初めの五字をぬき出して答えなさい。(句読点も一字とします)

問八 本文中の

本文中の B には、ユキコボシの花が咲く場所としての条件が三つ入ります。本文中からその三つの条件が書かれているところを探し、解答らんに合うようにぬき出して答えなさい。

問九

⑥ さつきの話の中の先生のように、ちよつとみくれて
とありますが、「さつきの話の中の先生のように」とは、本文中の「ア」～「エ」のど
の場面のことですか。記号で答えなさい。

二次の文章を読んで後の問いに答えなさい。(ただし、都合上本文の一部を省略してあります)

八月のある日、空はねずみ色に曇つて雨氣を帯びた風のすずしい昼過ぎであつた。私は二階の机にもたれてK君にはがきを書いていた。はがきの面の五分の四くらいまで書くと、もう何も書くことがなくなつたので、万年筆をにぎつたまま、しばらくぼんやり、縁側の手すり越しに庭のかえでのこずえをながめていた。すると私のすぐ眼の前に突き出ている小枝に養虫のぶら下がっているのが眼についた。それはこの虫としてはかなり大きいものであつた。よく見ると、養は主に紅葉

か、ともかくもこの干からびた糞をとおして中に隠れた生命の断片を想像するのは困難なように思われた。それで私は今、書きかけたはがきのさきへこんなことを書き加えた。

「今、僕の眼の前の紅葉の枝に糞虫が一匹いる。僕は蟻や蜂や毛虫や、たいがい虫について、その心持ちといったようなものを想像することができると思うが、^②この糞虫の心持ちだけはどうしてもわからな

②この藝中の心持ちだけはどうしてもわからない

の葉の切れはしや葉柄をつづり集めたものらしかったが、その中に一本 図ぬけて 長い小枝が交じっていて、その先の方は養の尾の尖端から下へ一寸（約三センチメートル）ほども突き出てぶかっこうにそりかえつ

これだけではがきのヨハクはもうなくなつてしまつたが、これが端緒（きつかけ）になつて私はこの虫についていろいろのことを考へたり想像したりした。

ていた。それがこの奇妙な紡錘体（真ん中がぶくらんだ形）のとつてとても
いたたいようなかつこうをしているのであつた。枝に取りついている
上端は眼に見えないほど小さい糸になつていたので、風の吹くたびに
養はさまざまに複雑な振り運動をし、また垂直な軸のまわりに回転も
していた。①今にも落ちそうに見えるが、実はなかなかしつかりして
いるのであつた。養虫自身は眠っているのか、あるいは死んでいるのか、

昔の学者などの中には、ほとんど年中、あるいは生涯、貪しい薄暗い家の中に引きこもつたきりで、深い思索や冥想にふけていたような人もあつたらしい。こんな人たちはすぐ隣に住んでいるゴシップ（うわさ話。またそれが好きな人）等の眼には、あるいはちょうどこの養虫のように気の知れない、また存在のおぼろげなものとしか見えなかつたかもしれない。**ゲンセ**とはただわずかな糸でつながつて、ひよう

写

ひょうとして風に吹かれているような趣があつたかもしれない。ただ、**糞虫**とちがうのは、幾年かの後に思索研究の結果を発表して、急に、あるいは徐々に世間を驚かしたことである。しかし中にはまとまった結果を得なかつたり、また得てもそれを発表しないで死んでしまった者もたくさんあるかもしれない。そんな人は、わきめにはこの糞虫と変わったところはなかつたかもしれない。

こんな空想にふけりながら見ていると、糞の上にすきまなく並んでいる葉柄の切片が、なんだかこの隠れた小哲学者の書棚に背書を並べた書物でもあるような気がした。

このようなことを考えた翌日の同じ時刻に、私は例のように二階の机の前に座つた。そして昨日の糞虫は、と思つて、おおよそこのあたりと思う**ケントウ**をさがしてみたが見つからない。そのうちにずつと高いところの大きな枝に何か動くものがあると思つてよく見ると、それが昨日のあのつてのついた糞虫であつた。ただ意外なことには、昨日生死もわからないように静まりかえつていた。^③あの小哲学者とは思われないように活動しているのであつた。糞の上端から黒く光つた頭が出ていた。それが波を打つて動くにつれて、紡錘体は一刻みずつ枝の下側に沿うて下りていった。ときどき休んで何かさがすような様子をするかと思つとまた急いで下りていく、とうとう枝の二又に別れたところまで来ると、そこから別の枝に移つて今度は逆に上の方へ向いて、^④がの不細工な重そうな糞を引きずり引きずり行つて行くのであつた。とつてのような長い棒がいかにもじやまそうに見えた。

見ているうちにだんだんこつけない感じがしてきて、つい笑わないうではいられなくなつた。そして昨日K君に書いたはがきは訂正しなければならなかつた。昨日の哲学者も、今日はやっぱり自分の家を荷やつかい(荷物を運ぶのがめんどろな様子)に引きずりながら、長すぎてじやまなとつてをもてあつかいながら、あくせくと歩いていった。いったいどういふ目的で歩いていっているのだらうと考へてみたが、たぶんやはり食うためだらうと思ひ思ひなかつた。

その日の夕方、思いついて字引でみのむしというのを引いてみると、この虫の別名として「木螺」というのがあつた。なるほどはつて行く様子はいかにも田螺かあるいはヤドカリに似ている。それからまた「避債虫(借金のため夜にげをしているような様子の虫)」という字もある。これもなかなかおもしろいと思つた。それから手づかな動物のことをかいた書物をさがしたが、この虫の成虫であるべき螺蛾がどんなもので

あるかわからなかつた。英語では何というかと思つて和英辞書(日本語を英語に直す辞書)を開けてみたが、虫の一種とあるばかりで**ヨウリヨ**を得なかつた。いったいこの虫が西洋にもいるだらうか。もしあれば、^⑤こんなおもしろい虫のことだから、ずいぶんいろいろな人が、いろいろなことを、これについて書いたのがありそうなものだと考へたりした。昆虫学者に会つたら聞いてみたいものだと思つてゐる。

「糞虫鳴く」という俳句の季題があるのを思い出したから、調べついでに歳時記(俳句の季語を集めて説明した本)をあけてみると、清少納言の「枕草子」からとして次のような話が引いてある。「糞虫の父親は鬼であつた。親に似て恐ろしくなつたら、親のわるい着物を引きかぶせてやり、秋風が吹くころになつたら、来るよとだまして逃げて行つたのを、^②そうとは知らず、秋風を音にきき知つて、父よ父よと恋しがつて鳴くのだ」というのである。どういふところから出た伝説だか、あるいは才女の空想から生み出されたことだか、とにかく現代人の思いもつかないようなことを考へたものである。しかしこの清少納言のオーソリテイ(定説。正当な考え方)が九百年もそのままに保存されてきたとすると、^⑥自然界に対する日本人の知識がいかに長い間、平和安穩であつたかといふことを物語つてゐる。

その後も二階へ上がるたびに氣をつけて見ると、糞虫の数は一つや二つではない。小さきまの数が少なくも七つ八つはいるらしい。長い棒の付いたのはまだほかにいた。中にはちょうど一本足のかかしに似たものもある。あるいは二本の長い棒を横たえた武士のようなもの。皆、たいがいはいじつとしてゐるが、ひるごろにはときどき活動しているのを見受ける。かれらにも一定の労働時間や食事の時間があるのかと思つたりした。ある時、大きなのがちょうど紅葉の葉を食つてゐるところを見つけたが、頭をさしのべて高いところの葉を引き曲げ、**カイコ**が桑を食うと同じようにして片はしから食ひ食うていた。近辺の葉はもうだいぶ食い荒らされてゐるのであつた。こんなところを見ているうちに糞虫に対する自分の心持ちはだんだんに変わつてきた。そして虫の生活が次第に人間に近く見えてくると同時に、いろいろの詩的な幻覚(まぼろしが見えること)は片端から消えていった。^⑦M君が来た時に、この話をしたら、M君は笑つて、「だいぶひまだと見えるね」と言つた。しかしM君自身もやはりだいぶひまだと見えて、この間自分で蟻の巣を底まで掘り返してみた経験話を話して聞かせた。(『科学と科学者のはなし』寺田寅彦)

問一 本文中のカタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで書きなさい。

問二 a 図ぬけて 例のように とありますが、それぞれ言いかえるとどうなりますか。次からもつともよくあてはまるものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 図ぬけて …… ア かえつて イ なみはずれて ウ とんがつて エ まちがつて
b 例のように …… ア いつもと同じく イ 手本どおりに ウ 規則正しく エ 人なみに

問三 ① 今にも落ちそうに見えるが、実はなかなかしつかりしてゐるのであつた。とありますが、(1)「今にも落ちそう」なのは何ですか。また、(2)「なかなかしつかりしてゐる」のは何ですか。それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア 糸 イ 枝 ウ 軸 エ 木 オ 糞 カ 葉



問四 ② この養虫の気持ちだけはどうしてもわからないとありますが、このように作者がはぎに書いた理由が述べられている一文を本文中から探し、初めの**五**字をぬき出して答えなさい。

問五 ③ あの小哲学者とありますが、作者が養虫を「小哲学者」と例えた理由としてあてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 社会からかけはなれて、ひょうひょうとしているようだから。
- イ 家の中で引きこもって深い思索にふけっているようだったから。
- ウ 何年かたつと、努力の結果を発表して世間を驚かせるようだから。
- エ 他の人から見ると、何を考えているのか分からずおぼろげな存在だから。

問六 ④ かの不細工な重そうな養を引きずり引きずりはて行くのであったとありますが、作者はこのような養虫の動きをどのように見立てていますか。本文中からふさわしい一文を探し、初めの**五**字をぬき出して答えなさい。

問七 ⑤ こんなおもしろい虫とありますが、ここで作者が「おもしろい」と述べている内容にあてはまるものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 養虫は木だけでなく書棚にもつく。
- イ 養虫には決まった労働や食事の時間がある。
- ウ 養虫はその姿形から色々な別名を持っている。
- エ 養虫は紅葉の葉を手当たりしだいに食べる。
- オ 養虫には手づかなもので調べても分からない謎が多い。
- カ 養虫には現代人には思いもつかないような伝説がある。

問八 ① 来るよ ② そうとは知らずとありますが、だれの動作ですか。それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

- ア 秋風 イ 養虫の父親 ウ 清少納言 エ 養虫 オ 作者（寺田寅彦）

問九 ⑥ 自然界に対する日本人の知識がいかに長い間、平和安穩であつたかということ物語っているとありますが、どういうことですか。次から三つともよくあてはまるものを選び、記号で答えなさい。

- ア 九百年も前に清少納言が養虫について書いたことが否定も訂正もされずに受けつがれてきたのは、日本人が自然界に対する伝統的なとらえ方を重んじて変化を好まなかったからだということ。
- イ 清少納言はすぐれた随筆家であつたので、彼女を上回るような人物はその後にも現れず、九百年の間その自然観が受け入れられてきたということ。
- ウ 日本は長い間外国との交流を断っていたので、自然界に対する西洋の科学的なとらえ方を取り入れることができず、九百年の間同じ考え方をしてしまったということ。
- エ 日本人は争いを好まないで、清少納言がひとたび自然観に対してのとらえ方を発表すると、遠慮してそれ以上の見方を述べずに九百年もの間養虫についての考え方は変わらなかったということ。

問十 ⑦ 詩的な幻覚とありますが、この内容にあてはまるものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 養虫は葉をむさぼり食う。
- イ 養虫は風で振り運動をする。
- ウ 養虫は父親を恋しがって鳴く。
- エ 養虫は鬼にすてられた子どもだ。
- オ 養虫は重そうな養を引きずってはう。
- カ 養虫は二本の刀を差した武士のようだ。

一

問一

1

2

3

問二

問三

にいる私がそこを

のよう感じて、

を

のようだと思ったこと。

問四

(1)

という仕組み。

(2)

問五

(1)

国語一三

の解答らん直接書きなさい

(2)

問六

問七

(1)

国語一三

の解答らん直接書きなさい

(2)

問八

のある
ところ

問九

二

干

ヨハク

ゲンセ

ケントウ

問一

からびた

ヨウリヨウ

カイコ

問二

a

b

問三

(1)

(2)

問四

問五

問六

問七

問八

1

2

問九

問十